

自然描写と人物心理の一致

有島武郎の『カインの末裔』を通して -

陳 穎

1. 序論

文学作品の中で、登場人物の心理を表現するのは非常に重要である。その方法には、心の動きや意識の在り方を分析して描く、所謂「直接心理描写」と、言語、動作、表情、自然状況などの描写を通して、心の動きを表現する、所謂「間接心理描写」とがある。前者については、すでに言及した研究いくつかあるが、後者、特に自然描写については、十分な研究は行われていない。果たして、自然描写と登場人物の心理とはどのような関係があるのだろうか。また、自然描写によって登場人物の心理は、いかに表現しうるのだろうか。そこで、本稿では、有島武郎の『カインの末裔』における自然描写と主人公である仁右衛門の心理がいかに一致するかを考察することによって、自然描写が登場人物の心理を適切に表現しうるか否かを論証してみたい。本稿では、まず第1に有島武郎と彼の作品『カインの末裔』について紹介する。第2に自然人としての仁右衛門の生き方を考察する。そして第3に、自然描写がいかに仁右衛門の心理と一致するかを検証する。

2. 本論

2.1 有島武郎と作品『カインの末裔』

有島武郎 - 小説家、評論家の有島武郎は明治11年(1878年)東京に生まれた。弟に洋画家の有島生馬、小説家の里見がいる。札幌農学校(現、北海道大学)卒業後、アメリカに留学し、ハーヴァード大学等で勉強した後、ヨーロッパで1年ほど生活している。帰国後、母校の教授となり英語や倫理などを講じた。明治43年同人雑誌『白樺』が創刊されると、同人として加わり文学活動に乗り出す。そして、『カインの末裔』や『生まれ出づる悩み』などの創作活動を通して社会矛盾や、芸術と実生活の相克を描き出した。武郎は大正8年の3月から4月にかけて、『或る女』の後篇を書くために、円覚寺の松嶺院に滞在した。さらに、『宣言一つ』を大正11年に発表して自己の立場を表明し、他方で財産放棄や生活改革を考える。実際に、北海道の狩太農場を開放し、白樺理想主義の実践を行なった。同年、個人雑誌『泉』を創刊して、生活および文学の打開を計った。大正12年(1923年)軽井沢の別荘で、波多野秋子が45歳でこの世を去っている。

『カインの末裔』は、大正6年7月に『新小説』誌上に発表され、有島武郎の文壇における評価をほぼ確立させたものであり、文壇外の読者層から熱烈に迎えらるるに至った第一歩の作品である。それまでに有島は長篇『或る女のグリンプス』をはじめ、『An Incident』『首途』（『迷路』の序篇）『宣言』『お末の死』など、相当に読みごたえのある長、短篇をいくつか発表していたが、一部の人々を除いては注目するものがなかった。「カインの末裔」は北海道狩太の有島農場に実際に居たことのある開拓農民をモデルに書かれている。しかし、全体は虚構の作品である。この作品を読んで、最初に気付くのは自然状況についての描写である。自然状況と主人公 仁右衛門の心理との一致はこの作品の著しい特徴だと思われる。

2.2 自然人 仁右衛門

自然状況と主人公 仁右衛門の心理との一致を検証する前に、主人公の仁右衛門の自然人としての生き方を明確にすることが重要であると考えられる。では、次の引用を見よう。

茲に一人の自然から今掘り出されたばかりのやうな男がある。而も掘り出された以上はそれが一人の人間であって、その母胎なる自然と噛み合はなければならぬ運命を荷ふと同時に、人間生活に縁遠い彼は、又人間社会とも噛み合はなければならぬ。彼は人間と融和して行く術に疎く、自然を征伏して行く業に暗い。それにも拘らず彼は、そのディレンマのうち在って生きねばならぬ激しい衝動に駆り立てられる。それは人からは度外視され、自然からは継子扱ひにされる苦しい生活の姿を描き出すであろう。カインの末裔なる仁右衛門は、その人である。（「自己を描出したに外ならない『カインの末裔』」
『新潮』大正八年一月号より）

こう説明されているようなパースペクティブのもとに、有島はこの作品では、旧約聖書の中に出てくるカイン 弟アーベルを殺したために神から永遠の流浪者たるべく運命づけられたカイン の末裔に喩えられる広岡仁右衛門という野性そのものの人物を取り上げた。仁右衛門はマッカリヌプリ山麓の農場にどこからともなく流れ込んでくるが、農場の規則などは無視して無法者的振る舞いを次々と重ねた挙句、農場関係の全ての人たちから見放され、赤ん坊は病気で失い、愛馬も競馬のときの事故で失い、妻とともにどこへともなく淋しく立ち去って行く。この作品では、以上のような無知の自然人の獣めいた生活の実相が白日のもとに照らし出されている。

主人公 仁右衛門の自然人としての生き方を明確にした上で、次に入りたい。

2.3 自然描写と仁右衛門の心理

ここでは、『カインの末裔』のプロローグ、第三、四、五章、そしてエピローグという順序で、考察していきたい。

2.3.1 プロローグについて

作品最初の舞台は、冬が「空まで逼った」北海道の、夜に入ろうとする荒涼たる大草原である。こんな風景を背景にして、農夫である仁右衛門夫妻が登場した。

長い影を地にひいて、瘦馬の手綱を取りながら、彼れは黙りこくって歩いた。大きな汚い風呂敷包と一緒に、章魚のように頭ばかり大きい赤坊をおぶった彼れの妻は、少し跛脚をひきながら三、四間も離れてその跡からとぼとぼとついて行った。

北海道の冬は空まで逼っていた。蝦夷富士といわれるマッカリヌプリの麓に続く胆振の大草原を、日本海から内浦湾に吹きぬける西風が、打ち寄せる紆濤のように跡から跡から吹き払っていった。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になったマッカリヌプリは少し頭を前にこごめて風に歯向いながら黙ったまま突立っていた。昆布岳の斜面に小さく集った雲の塊を眼がけて日は沈みかかっていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細いほど真直な一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろよろと歩く二本の立木のように動いて行った。

プロローグにおける自然描写は仁右衛門のどのような心理を表現するのであろうか？次の四つのキーワードを中心に分析したい。

キーワード	仁右衛門の心理
「寒い風」	厳しい自然と闘わなければならない
「日は沈みかかった」	落ち込んで行く
「一本の樹木も生えていなかった」	荒涼、茫然
「心細いほど真直な一筋道」	自分のこれからの運命をこの大草原に賭けるほかしかない。

有島は、以上のような自然状況を設定して、仁右衛門の心理の動きを読者に伝達するのではなかろうか。

2.3.2 三章について

仁右衛門は農場に帰るとすぐ遅しい一頭の馬と、プラオと、ハーローと、必要な種子を買い調えた。

農場でたくましく働く仁右衛門が明るく描写されている。それには、明るい自然描写が対応している。

林の中の雪の叢消えの間には福寿草の茎が先ず緑をつけた。つくみとしじゅうからとが枯枝をわたってしめやかなささ啼きを伝えはじめた。

風も吹かず雨も降らず、おとのないよるだった。

枝に残った枯葉が若芽にせきたてられて、時々かさっと地に落ちた。天鷲絨のように滑かな空気は動かないままに彼れをいたわるように押包んだ。荒くれた彼れの神経もそれを感じない訳には行かなかった。物なつかしいようななごやかな心が彼れの胸にも湧いて来た。彼れは闇の中で不思議な幻覚に陥りながら淡くほほえんだ。

以上のように、冬から春へと変わる季節が描写されている。作品最初の自然「一本の樹木も生えていなかった」とは違い、第三章では「緑」、「若芽」という明るく感じさせられる描写が出て来る。冬から春への変化は主人公の気持ちが明るくなっていくことを想像させられる。

2.3.3 四章について

四章は、特に自然あるいは天候と、仁右衛門の気分との対応が著しい。まず、次の自然描写を見てみよう。

春の天気の順当であったのに反して、その年は六月の初めから寒気と淫雨とが北海道を襲って来た。早魃に饑饉なしといい慣わしたのは水田の多い内地の事で、畑ばかりのK村なぞは雨の多い方はまだ仕やすいとしたものだが、その年の長雨には溜息を漏さない農民はなかった。

森も畑も見渡すかぎり真青になって、掘立小屋ばかりが色を変えずに自然をよごしていた。時雨のような寒い雨が閉ざし切った鈍色の雲から止途なく降りそそいだ。低味の畦道に敷ならべたスリッパ材はぶかぶかと水のために浮き上って、その間から真菰が長く延びて出た。蛸斗が畑の中を泳ぎ廻ったりした。郭公が森の中で淋しく啼いた。小豆を板の上に遠くでころがすような雨の音が朝から晩まで聞えて、それが小休むと湿気を含んだ風が木でも草でも萎ましそうに寒く吹いた。

農夫の運命が自然あるいは天候に密接に関わっていると言えよう。六月のはじめからの「寒気」と「淫雨」に憂鬱になっている彼は、運送店に馬車追いに出かけるが、仕事がな

い。そして賭博をやり敗ける。その帰り道は次のように描かれている。

だらしなく降りつづける雨に草木も土もふやけ切って、空までがぼとりと地面の上に落ちて来そうにだらけていた。面白くない勝負をして焦立った仁右衛門の腹の中とは全く裏合せな煮え切らない景色だった。

この不快感により、仁右衛門は佐藤の子を殴り、さらにその父にまでも暴力をふるうことになる。プロットの進行の契機に天候の不快が直接関わっていると見えよう。

2.3.4 五章について

五章では、仁右衛門の運命はまた転機がある。彼は、大金が入ったために、居酒屋で大いに酒を飲み、帰りに妻に「モスリンの端切れ」を買って帰る。その帰り道の夜の自然描写は以下のものである。

幾抱えもある椴松は羊歯の中から真直に天を突いて、僅かに覗かれる空には昼月が少し光って見え隠れに眺められた。彼れは遂に馬力の上に酔い倒れた。物慣れた馬は凸凹の山道を上手に拾いながら歩いて行った。

ここで、「馬」も自然状況であると考えられる。「真直」な「椴松」や「山道を上手に拾いながら歩いて」いる馬が非常に明るいイメージが感じられる。

2.3.5 エピローグについて

仁右衛門夫妻が「何処からともなくk村に現れてから」、一年を経て再び冬となる。「自然」と「人間社会」と対決し、敗れ去った「自然人」の、再び何処ともなく、去ってゆく悲劇的フィナルである。

その辺から人家は絶えた。吹きつける雪のためにへし折られる枯枝がややともすると投槍のように襲って来た。吹きまく風にもまれて木という木は魔女の髪のように乱れ狂った。

二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しずつ倶知安の方に動いて行った。

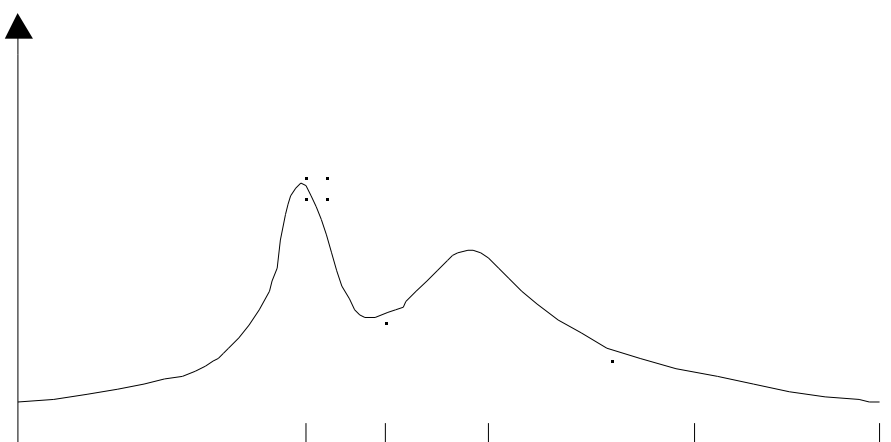
椴松帯が向うに見えた。凡ての樹が裸かになった中に、この樹だけは幽鬱な暗緑の葉色をあらためなかった。真直な幹が見渡す限り天を衝いて、怒濤のような風の音を籠めていた。二人の男女は蟻のように小さく

その林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまった。

プロローグと同じように、北海道の荒涼たる冬の風景が描写されている。そして、プロローグと同じように、仁右衛門の茫然たる気持がもう一度感じられるのであろう。

2.3.6 まとめ

最後に、作品全体から見てみよう。主人公である仁右衛門の一年を春・夏・秋・冬、四つの季節に分けて見れば、自然状況と主人公の心理との一致が一目瞭然であろう。



上の図が表記しているように、仁右衛門の一年で、順調な境遇は明るいイメージが感じられる季節、即ち春と夏にあった。それに対し、寒さの厳しい冬と「寒気」、「淫雨」に襲われた6月、そして収穫のない秋は仁右衛門の気分の低迷期であった。一般的に、秋が収穫の季節であると考えられるが、作品自体から見れば、仁右衛門の秋はそうではない。次の引用から、分かるだろう。

春先きの長雨を償うように雨は一滴も降らなかった。秋に収穫すべき作物は裏葉が片端から黄色に変わった。自然に抵抗し切れない失望の声が、黙りこくった農夫の姿から叫ばれた。

3、結論

以上、『カインの末裔』における自然描写と主人公の心理の一致性について検察して見た。以上のような対応関係を有島武郎が意識的に設定していることは疑いない。では、なぜ自然描写と主人公の心理とが一致しているのでしょうか。その疑問を解決するには、

主人公の自然人としての生き方を考えなければならない。本稿の 2.2 が説明したように、仁右衛門は「無知の自然人」であるために、内面からの造型、即ち直接心理描写がしにくいである。そして、人との接触が汚らしい言葉と暴力に限っているため、心理を表現する言語も表情も欠乏した人物である。すなわち、仁右衛門のような登場人物の心理を表現するには、直接心理描写および言語描写、表情描写などの間接心理描写は不適切である。だから、自然描写を通して、心理の動きを表現するのはよい方法であると言ってよいだろう。

無論、『カインの末裔』だけでは、十分に論証できない。自然描写を通して、登場人物の心理を表現する有島の作品が、他にも様々であると思われる。例えば、『生まれ出づる悩み』も注目しなければならない例である。同じ作家でも登場人物によって、自然描写の方法と果たす役割は違うであろう。『生まれ出づる悩み』の中で、主人公「君」は、学生生活を中絶して、北海道の荒海を相手に漁夫として生活を立てながら、強い画家志望にとらえられた青年である。そして、「私」は、北海道に農場を持ちつつ、作家としての自己確立を図っている人間で、ほぼ作者有島その人に重なっているといつてよい。「この二人の苦悩が『この地球の生まんとする悩み』として意味づけられている。北海道の大自然の持つスケールとダイナミズムは、単なる背景ではなく、両者（主人公『私』と『君』）の芸術を生み出す根源的な原動力となっている。」（『生まれ出づる悩み』 相原和邦）自然の中の野性に憧れ、それを常識道徳や社会的制約を踏み破るテコとしようとしていた当時の有島は、作品を通して、自分の志向をアピールしていたのであろう。

『カインの末裔』また『生まれ出づる悩み』のように、有島文学の「労働」と結びついた自然のとらえかたは、日本近代文学史上でも見過ごせない位置を占めると言われている。

参考文献：

- 『悲劇の知識人 有島武郎』 1983年1月10日 安川定男 新典社刊
- 『有島武郎集』 1970年9月15日 現代日本文学大系35 筑摩書房
- 『有島武郎』 1986年3月10日 日本文学研究資料業書 有精堂
- 『生まれ出づる悩み』 相原和邦